MEIJIMURA

明治村だより

Vol.86 2016 Winter

CONTENTS

長崎居留地二十五番館 保存修理工事が進められています …… 2
語り継ぐ建築 …… 4
冬の催しもの …… 5
A La Meiji-mura …… 6
阿川村長とめぐるスペシャルガイドツアーを開催 …… 8

阿川村長とめぐる スペシャルガイドツアーを開催

昨年に引き続き、阿川村長とめぐるスペシャルガイドツアーを11月25日（金）に開催しました。多くの応募者の中から、抽選で選ばれた参加者たちは、阿川村長と中川館長と談笑しながら、普段は気づくことができない明治村の一面を発見し、晩秋のひとときを過ごしました。

表紙錦絵
浅草金龍山広小路之図　歌川芳虎画　明治4（1871）年

12月 2016年

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	★3
★4	5	6	7	8	9	★10
★11	12	13	14	15	16	★17
★18	19	20	21	22	★23	★24
★25	26	★27	★28	★29	★30	31

1月 2017年

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	★7
★8	★9	10	11	12	13	★14
★15	16	17	18	19	20	★21
★22	23	24	25	26	27	★28
★29	30	31				

2月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	★4
★5	6	7	8	9	10	★11
★12	13	14	15	16	17	★18
★19	20	21	22	23	24	25
26	27	28				

■は休村日
★は「きらめき 明治村」開催日

平成28年12月12日発行
「明治村だより」第86号（平成28年 冬）

発　行　博物館明治村
〒484-0000　愛知県犬山市内山一番地
電話（0568）67-0314　　http://www.meijimura.com
製　作　大日本印刷株式会社

『明治村 だより』 第87号発行のお知らせ
発行時期　平成29年3月中旬（予定）
申込方法　「明治村だより」第87号ご希望の旨及びご住所・お名前を明記の上、送料（含 発送手数料）140円とともにお申し込み下さい。

長崎居留地二十五番館保存修理工事が進められています

はじめに

博物館明治村三丁目三十一番地、入鹿池を東に望む高台に、長崎居留地二十五番館（以下、二十五番館と略記）は建っています。この建物は、明治二十二（一八八九）年に建てられた本館と、明治四十年代初頭に増築された別館の二棟からなる洋風の住宅建築です（図1～3）。この建物は、長崎南山手外国人居留地二十五番地に建っていましたが、昭和四十一（一九六六）年に明治村へ移築されました。移築されてからの二十五番館は、山手の居留地に所在していた昔日を遠目に懐かしむかのように、起伏に富む村内の敷地と、長崎湾に見立てられた入鹿池とが織り成す景観に溶け込みながら、今日まで五十年の年月を過ごしてきました。

移築後五十年を経た二十五番館は、屋根、床板や床組等の木部と各部位の塗装などの劣化が進んでおり、根本的な修理が必要な状況にありました。そのため、屋根替え、床下の防湿対策、耐震補強、建具を含む木部、塗装の修理に平成二十七年十二月より着手しました。ここではその工事の概況と本年十月末現在の進捗状況等をご紹介いたします。

図1　修理前正面外観（左：本館、右：別館）

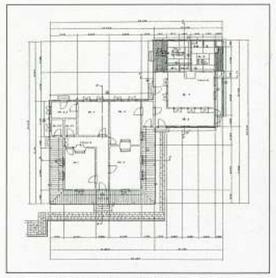
図2　平面図（左:本館、右:別館）

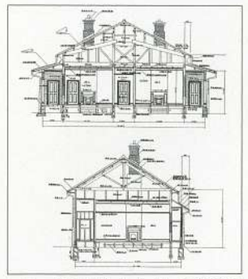
図3　断面図（上:本館、下:別館）

一、二十五番館の概要

本館は東西約一五・五メートル、南北約一五メートルのほぼ正方形で、その北東に東西約一〇メートル、南北約一二・七メートルの別館が接続します。本館・別館ともに木造平屋建て、屋根は寄棟造、桟瓦葺、外壁は下見板張りペンキ塗仕上げです。本館は、正面である南面と両側面に、庇の屋根が高く、大きくなりすぎないよう主屋より段下げしたベランダを廻し、主屋の軒には漆喰塗の蛇腹を廻しています。別館は、東面に屋根を主屋より段下げした下屋が取り付きます。本館・別館の屋根には、ともに煉瓦積の煙突が設置されています。

本館は暖炉を備えた洋室三室を含む七室で、別館は暖炉を備えた洋室一室と、その前面に大きなガラスの引違い窓がはめられた開放的な洋室、また背後に和室二間と縁側を備えます。内部は、本館全体が洋風であるのに対し、別館は洋風と和風を並存させている点が特徴です（図4、5）。

図4　本館修理前内観

図5　別館和室修理前内観

本館は、明治二十二年に建てられたもので、当初は三菱の長崎造船所に勤める英国人が住んだと伝えられます。しかし、本館建設から約二十年後の別館増築時の経緯については、明らかになっていません。二十五番館は第二次大戦後、進駐軍による接収を経て、大蔵省（当時）職員宿舎として使用されていました。昭和四十一年、この土地および建物の売却に伴い、明治村が移築先として引き受けることを申し出、保存されることになりました。

二十五番地は、長崎湾を眼下に望む傾斜地の一画に位置していました。二十五番館を明治村へ移築するにあたり、入鹿池を見下ろせる高台が敷地に選ばれ、屈曲する石段を登る建物へのアプローチが踏襲されるなど、旧所在地の立地条件を再現することが意識されました。

二、工事の内容と進み具合

二十五番館の保存修理工事について種別ごとに概要と進捗状況をご紹介します。

仮設

仮設足場は、本修理が屋根替えを伴う工事のため、建物全体を仮設の屋根ですっぽりと覆う「素屋根（すやね）」を架ける計画としました。また、一般のお客様や専門家に向けて現場見学会を開けるよう、足場の幅や各階の高さ寸法を、通常の工事用足場よりも余裕をもたせ、安全性に配慮した設計としています。

図6　本館屋根野地板撤去後

屋根

二十五番館の屋根は、移築時に桟瓦お

よび鬼瓦がすべて取り替えられていますが、冬季の凍結の影響で広範囲に瓦のひび割れや剥落が生じていました。このため、仮設の素屋根を設置したのち、屋根瓦および瓦の下に敷かれていた葺土をすべて撤去し、その下に張り込まれていた野地板を全面にわたり取り外しました（図6）。

屋根瓦については今後、桟瓦、鬼瓦などの瓦をすべて新規に製造し、本館・別館ともに全面的に葺き替える計画です。また二棟の建物の屋根には、瓦の継ぎ目に漆喰を厚く塗り盛る仕様が移築時に施されていましたが、経年により漆喰がほとんど剥落していたため、今回の修理ではこれを復原する予定です（図7）。

図7　昭和41年移築竣工時

基礎

二十五番館の基礎には、長崎県産の諫早石とみられる石材が用いられていました。今回の修理では、本館・別館ともに、石積部については、補強として鉄筋コンクリート造基礎梁を増設しました。別館では全面に防湿フィルムを敷き込み、鉄筋コンクリート造補強土間を設置し、耐震補強を図りました。

また、二十五番館の床下は湿気が著しく、床下の環境を根本的に改善する必要がありました。特に本館部分では、地中に浸透した水の流路が浅い位置に走るとみられ、地表から放出される湿気の影響を受け、床組がひどく腐蝕していました。この改善策として、本館では別館と同じく防湿フィルムを敷き込んだ上に、防湿土間コンクリートを設置することにしました。加えて、本館・別館ともに、間仕切り基礎については、メンテナンスのための人通孔を兼ねた換気孔の新設・拡張を行い、通気性の向上を図りました。

図8　基礎補強コンクリート打設工事

前述のコンクリート打設工事にあたっては、敷地の近くまで大型車両の進入が必要となるため、お客様の見学に影響が及ばないよう、夏季の休村日に実施するよう綿密な施工計画を立て、無事工事を終えることができました（図8）。

床・床組・軸組の修理

前述したコンクリートの打設を伴う基礎工事に先立ち、本館・別館の床板および床組の部材を解体し、全室において劣化状況を詳細に調査しました。その結果、本館の床板と床組、軸組の下方において、地表からの湿気および床下の通気性の不良が原因と考えられる腐食やシロアリによる被害が判明しました。

今回の修理では、可能な限り既存の部材を再利用することを前提としつつ、取り替えが必要な箇所については同種の木材を用いることを原則としています。軸組では、特に別館の土台や柱脚部が腐食している箇所があり、当該箇所では柱をジャッキにより持ち上げ固定したのち、土台を部分的に取り替え、柱の根継を行いました（図9）。床組では、部材の損傷部分を欠き取った上で、必要に応じて部材表面への矧木（はぎき）と樹脂充填を併用した修理を行いました（図10）。また、間仕切り壁上方の水平材である頭繋（あたまつなぎ）や、小屋組の垂木を受ける軒桁に、一部で雨水の侵入に起因する腐食やシロアリによる被害が見られたため、床廻りと同様、矧木および樹脂充填による修理を施しました。

図9　別館土台取り替え作業

図10　本館床組修理後

建具と塗装

ドアや窓などの建具は、全点を取り外した上で工場へ運搬して補修する必要がありました。二十五番館のドアは、窓ともに計二十七ヶ所にのぼります。ドアについては、腐食の部分補修、錠前の取り付け等を行っています。窓は、本館では西洋館で一般に用いられる上げ下げ窓、別館では引違い窓が主に用いられています。窓枠から取り外したガラスを丁寧に取り外し、腐食部分の補修やゆがみの矯正を行っています。これらの建具は、補修の工程が終わったのち、塗装のため別の作業場へ運搬し、最終的に建て付けの調整をしながら建物に再設置する予定です。

建具およびその廻りの木部では、ペンキの塗り重ねにより木材の杢目（もくめ）の表情を描いた、「杢目塗り」という特殊な技法が、移築時に再現されていました。これは、西洋館や船舶の内装によく用いられた塗装技法のひとつです。今回の工事では、杢目塗りも修理することになっています（図11）。

図11　本館室内から見た上げ下げ窓

三、小屋組の修理と調査

今回の修理工事では、屋根替えに伴い、本館・別館ともに屋根瓦から野地板までをすべて撤去したため、屋根を支える構造体である「小屋組（こやぐみ）」があらわになりました。二棟ともに主要な部材に損傷はなく、概ね健全な状態であったため、修理では垂木、隅木の部分取り替えにとどめる予定です。

工事にあわせて、小屋組の技法に関する調査を行いました。本館の小屋組部材の表面には、創建時に大工が施工するにあたり、部材の位置を識別するために付した番号である、「番付（ばんづけ）」と呼ばれる墨書が、はっきりと確認できました（図12）。また部材の中には、尺寸を単位とする寸法の墨書が残るものがあり、この建物が日本の伝統的な寸法体系に読みかえて施工されたことが裏付けられました。本館の構造では、伝統的な和風の構造である「和小屋（わこや）」の形式を基本としつつ、これに部材を補足することによって、西洋式の技術であるトラス構造に近づけようとした意図がうかがえました。

図12　登梁・小屋束に残る墨書

一方、別館の小屋組は、水平・垂直・斜めの各部材が三角形を構成しながら組み立てられ屋根を支える、西洋式のトラス構造である「洋小屋（ようこや）」です。本館と比較すると、別館では西洋式の建築技術の受容が進んでいることがわかります。しかし、別館は洋風の技術や意匠を用いながらも、明らかに尺寸を用いた計画で設計・施工されているほか、床の間や縁側を備える座敷を含む二間の和室、引違い窓といった、和風住宅の要素や技法が取り入れられています。近代日本の住宅建築における和洋折衷のプロセスの一例が見出せるといえるでしょう。

おわりに

今回の修理工事は、平成三十一年三月末竣工予定と長丁場となります。今後は、小屋組の補強、外壁や建具の塗装修理、屋根の復旧、設備の更新、外構整備などの工事が順次進んでいく予定です。

二十五番館は、近代日本の住宅建築における西洋式の技法との出会いと、その消化の過程が、本館・別館という二十年を隔てて建設される一連の建物からうかがえる点で、興味深い実例といえます。今回の根本的な修理工事を通して、二十五番館が適切な状態で次の世代へ受け継がれることはもちろん、これまで日の目を見ることがなかった、この建物の価値を支える更なる知見が得られることが期待されます。こうした意義をわかりやすく発信しながら、私たちは今後も工事を進めてまいります。

冬の催しもの
12▶2月

初開催　明治建築をてらすイルミネーション

きらめき明治村

平成28年12月3日（土）～平成29年2月19日（日）の土日祝

点灯時間 ★ 16:30～20:00

※「きらめき明治村」会場以外、【12月】16:30【1月】17:00【2月】17:30以降は、ご見学いただけません。

会　場 ★ 帝国ホテル中央玄関を中心とした「5丁目」

※一部建造物を除く

日本のイルミネーションの歴史

日本で本格的なイルミネーションが登場したのは、明治36（1903）年に大阪で開催された第5回内国勧業博覧会。初の夜間開催に伴い、会場はたくさんのイルミネーションで飾られ、視覚的興奮、また人々の心の潤いを与えることに貢献するものとなりました。

きらめきクリスマス

会場／聖ザビエル天主堂

★クリスマスミサ
開催日／12月25日（日）　時　間／13:00～
出　演／コンプリオ
大切な人と素敵な時間をお過ごしください。

★クリスマスコンサート
開催日／12月17日（土）　時　間／①13:00～　②14:30～
出　演／金城学院中学校ハンドベル
開催日／12月24日（土）　時　間／13:00～
出　演／師勝はなの樹幼稚園
開催日／12月25日（日）　時　間／①14:30～　②16:00～
出　演／コンプリオ

昼に楽しむならコレ！
ココロトキメク★きらめき★さがし

明治村を巡り、あなたの心を灯す『きらめき』を見つけよう！
クリアするとステキなプレゼントが！　さらに全種類をクリアした方には「きらめきオムライス」券をプレゼント。

受　付／近衛局本部付属舎、東京駅警備巡査派出所
時　間／10:30～15:30
料　金／1種類300円（全８種）

きらめきグルメ!!

きらめきオムライス
〈明治の洋食屋
オムライス＆グリル
浪漫亭〉　1,400円

ビーフシチュー
〈明治の洋食屋
オムライス＆グリル
浪漫亭〉　1,800円

牛鍋ドッグ
〈金沢監獄周辺〉　1個500円
※牛鍋ドッグはきらめき明治村開催日の17時より販売

※売り切れの際は、ご容赦願います。

謎を解き、変装して潜入せよ！

明治怪盗GAME
明治時代の光と影

参加対象 各回定員 80名様

2016年春より本格始動した謎解きゲーム「明治探偵GAME」と「きらめき明治村」がコラボした謎解きイベントをこの冬、開催！

STORY
明治の世を賑わせる怪盗。次の標的に選んだのは、三重県庁舎に保管されている宝「あかり」。キミは三重県庁舎に潜入して、見事標的を盗み出せるか!?

● 開催日程
【1月】 14（土）・15（日）・21（土）・22（日）・28（土）・29（日）
【2月】 4（土）・5（日）・11（土・祝）・12（日）・18（土）・19（日）

会場・受付｜明治村ホール
時間｜①12：00～13：30 ②15：00～16：30
※途中入場不可
料金｜前売券2,400円　※事前予約制 ※入村料別途必要
前売券発売箇所｜タカラッシュ！ショップ、e+（イープラス）、PassMarket ほか
主催｜株式会社 タカラッシュ

予告
あらたな怪事件を解決せよ！
明治探偵GAME 2017年3月より開催決定！

各イベントの詳細・お問い合わせ先　http://www.meijimura.com　または 0568-67-0314

※イベントは予告なく変更・中止となる場合があります。

※写真・イラストはイメージです。

御料車天井画に見る日本美術の技法

●1丁目12番地　鉄道局新橋工場

鉄道局新橋工場内に展示されている「昭憲皇太后御料車（五号御料車）」の女官室と御寝室には、帝室技芸員であった日本画家・橋本雅邦による、桜と紅葉の天井画が飾られています。今回は、車内を豪華に彩るこの天井画について、普段ではご覧いただけない細部の描写技法をご紹介します。

昭憲皇太后御料車（五号御料車）は、明治三十五（一九〇二）年三月に、御料車の製造・保守工事を一手に請けていた、国有鉄道大井工場にて製造されました。車両内の天井のほとんどに桐板が使われており、その板は柾目と呼ばれる直線的な木目の部分だけで作られています。

女官室の天井画を見てみるとそれぞれ桜と紅葉が描かれています（写真1、2）。桜は画面の左隅から中央へ向かって、満開の桜を携えた枝が広がります。対して紅葉の画面を見ると、画面の中央上部から枝が左右に分かれて広がり、まるで実際に木の下から枝を見上げたかのような印象を与えます。

次に、御寝室の天井画を見てみると（写真3、4）、女官室では別々に描かれていた桜と紅葉が一つの画面に描かれています。両種の枝は、御寝台側から通路側の天井画へと伸び行き、画面は二つに別れていますが一つの情景を描いていることがわかります。春の桜と秋の紅葉を描くことで、年間を通して華やかに栄えるような願いが込められているのではないでしょうか。

続いて、それぞれの描き方を見てみましょう。桜の花は墨で輪郭線が描かれ、白の絵具がのせられています（写真5）。一見斑があるように見えますが、一番手前に来る花は濃く、その後ろに来る花は薄くというように、絵具の濃淡によって立体感を表現していることがわかります。また、幹は墨をのせた筆の運びによって幹の質感と立体感を表現しており、コケの描写には、墨が乾く前に緑の絵具を乗せることでにじませる「垂らし込み」という技法が使われています（写真6）。この技法は紅葉の一部分の表現にも見ることができ（写真7）、葉脈は金で滑らかに描かれ、一枚一枚の葉の向きを表現しています。画面の空白部分には金砂子が施されていますが、よく見ると桜や紅葉を避けている部分と重ねられている部分があります（写真8）。枝や葉、花の細かな形状を綺麗に避けるため、「えんぶた」と呼ばれる薄い和紙と接着力の弱い布海苔を用いたマスキングの手法が使われています。

これら二つの部屋の天井画には「落款」と呼ばれる、作者の署名や印がありません。これは鑑賞するための絵画としてではなく「室内装飾」として描かれたためか、あるいは、御用絵師たちが宮中や幕府などに絵画を献上する際、落款を伴わなかったという慣例から、御料車の天井画も同様にしたと考えられます。天井画を描いた橋本雅邦は、御用絵師の家に生まれたため、こうした慣例に倣ったのかもしれません。

橋本雅邦は明治二十三（一八九〇）年に、帝室（皇室）が美術工芸の奨励を目的として任命した第一回目の帝室技芸員制度で任命されたうちの一人でした。日本の伝統技法を駆使した御料車内部の装飾は、絢爛豪華であるだけではなく、当時の日本が美術工芸の技術向上へ注力した、その成果物とも言えるのではないでしょうか。

参考文献

・大井工場九〇年史編纂委員会　一九六三『大井工場九〇年史』日本国有鉄道大井工場

・三の丸尚蔵館展覧会図録　二〇〇八「帝室技芸員と一九〇〇年パリ万国博覧会」宮内庁

・東京藝術大学大学院保存修復日本画研究室監修　二〇一四『日本画名作から読み解く技法の謎』世界文化社

フランス製の錠

●1丁目8番地　西郷従道邸

西郷従道邸は、西郷隆盛の弟である西郷従道によって明治十年代に、接客の場として建てられた洋館です。建物の設計には、当時日本に滞在していたフランス人技師・レスカスが関与しているとされ、カーテンボックス、建具などの金具、そして廻り階段等、内部を飾る部品の多くは舶来品とされています。今回は、扉に使用されている錠に注目してみたいと思います。

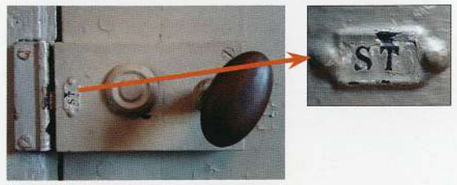

写真1　西郷邸に使用されている錠　※ドアノブについては製造業者等詳細は不明

ここでいう錠とは、扉等の建具に取り付ける金具で、多くは鍵によって開閉されるものを指します。

西郷従道邸に使用されている錠等の金物は、フランスの錠前業「ブリカール社」製と考えられています。建物内の錠や戸締り金物を確認すると、一部のものに「ST」という刻印が見られます（写真1）。一九〇〇年に発行された同社のカタログの見開き扉には、西郷邸に見られた刻印と同一の「ST」というマークが記載され、同型の錠が掲載されているからです（写真2、3）※1。

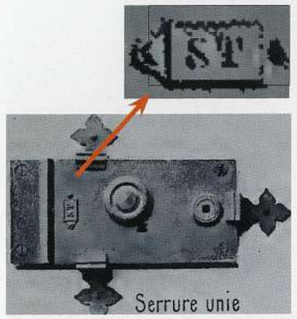

写真3　カタログに掲載された西郷邸と同型と思われる錠

写真2　ブリカール社カタログの見開き扉

ブリカール社は現在も、フランスの錠前メーカーとして営業を続けています。同社は、一七八二年にルイ・シャルル・スターリンによってパリで創業されました。その後、一八三五年には創業者スターリンの弟子となったウジェーヌ・ブリカールによって、先ほどご紹介した「ST」（創業者「STERLIN」の頭文字二文字を取ったと考えられる）ブランドが確立されます※2。

ではなぜこのフランス製の錠が、西郷従道邸に使用されたのか、そこにはこの建物の設計に関わったとされるレスカスの存在があります。レスカスは、明治九（一八七六）年から横浜で建築事務所を構えながら、ブリカール社の代理人も兼ねていました※3。したがって代理人を努めていたレスカスを通じてブリカール社の錠が購入され、西郷従道邸に使用されたと考えられます。

錠は、古代エジプトではすでに使用されたと言われており、世界各地で様々な形状の錠が使用されてきました。日本でも中国から伝来した錠が、神社や仏閣などで古くから使用されてきました。そこでは、錠に対して財産や所有物を守るという機能性だけではなく、形状や装飾に趣向を凝らすことによって室内装飾の一部となったり、富や権力の象徴、あるいは魔除け、厄除けといった宗教的な意味合いが付与されることもありました。西郷従道邸に使用されているブリカール社の錠は、非常にシンプルな造形です。しかし、先にご紹介した同社のカタログには、様々な装飾が施された百種を超える錠が掲載されており、当時のヨーロッパにおいて錠が単なる戸締りのための金物ではなかったことが窺えます（写真4）。西郷邸においても、ただ戸締りのためだけではなく、洋館にふさわしい装飾のひとつとして扉に使用されたのではないでしょうか。

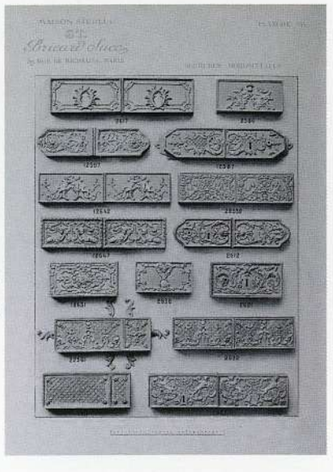

写真4　カタログに掲載されている錠の数々

建物に入るとき、あるいは部屋に入るとき、少し立ち止まり、その扉に使用された錠などの金物にも目を向けてみてください。そこには、様々な由来や意味を持った金物が使用されているかもしれません。

※1　インターネットアーカイブが運営する「オープンライブラリー」より取得。

※2　ブリカール社のインターネットホームページを参照した。現在同社の製品には「ST」というマークは入っていない。

※3　『明治村建造物移築工事報告書 第一集』p. 4

参考文献

・INAXギャラリー名古屋企画委員企画　一九九〇『鍵のかたち・錠のふしぎ』株式会社INAX

・平山育男　二〇一六「旧西郷従道住宅の建築年代と住宅の整備について」『日本建築学会計画系論文集』第八十一巻 第七百二十八号 日本建築学会

・堀勇良　二〇〇三「外国人建築家の系譜」『日本の美術八』第四百四十七号 至文堂